

川瀬 由照

早稲田大学文学学術院

龍角寺の本尊、銅造薬師如来坐像（重要文化財）は現在奉安殿と称される収蔵庫宮殿内に安置される。頸部から上の頭部のみ古く、以下は江戸時代の後補とされる。本像の形状および品質構造についてはこれまでも本像を扱う論考の中で言及されてきており（関野 1932・丸尾 1932・香取 1935・上田 1942・松山 1981 など）、最近では岩佐光晴氏による調査報告があり（岩佐 2014）、詳細に論じられている。ここでは頭部の造形と制作年に絞って言及したい。

形状は肉髻をあらわし、現状螺髪はなく、肉髻珠・白毫相の痕跡も確認できない。耳朵は欠損するが環状となっている。

銅の一鑄で、蠟型とみられる。像内より観察すると肉髻内まで中空で、頭部外形に沿って中型をつくる。銅厚は 0.8cm ほどで均一な厚さを保ち、鑄肌は平滑で熟練した鑄造技法がうかがえる。頭頂中央に鉄心を抜いた痕跡がみられ、抜取り後鑄掛けしている。現状、肉髻と後頭部には金の痕跡がみられる。

『龍角寺縁起』（田中 1938）によれば龍角寺の草創は和銅 2 年（709）に龍天女によって一夜のうちに建立されたと伝える。『龍角寺略縁起』では元禄 5 年（1692）12 月 16 日に本堂が罹災、入仏供養は翌年 3 月 6 日に行われたと記す。本体が被災損傷し、体部以下が新たに造りなおされたのがこの時とされている。

本像は白鳳彫刻、東国の古代仏像を扱う場合必ず取り上げられてきたが、近年ではその鑄造技法や造形的なレベルの高さから検討をうながす意見が多い。たしかに岩佐氏の指摘にあるように型持や筭を用いずに鉄芯のみで銅厚を均一

にして鑄造する技法は手慣れており、像内の平滑な鑄肌からも高い技量が看取される。

造形の上でも白鳳彫刻の典型とは言えず、いっそう進んだ写実表現がうかがえる。本像の造形の特徴は眼とふくよかな肉付きにある。上瞼の輪郭線は二重で、うねりながら長く切れ長にあらわされ、下瞼は目頭から弧を描いてやはり長くあらわされながら目尻で上瞼に合わさる。切れ長の眼は興福寺仏頭にも見られるがこれほど長いものは少ない。さらに前頭骨の中央、眉間の中央部を窪ませており、頭骨を意識した形状がつくられており、頬の膨らみも白鳳仏にみられる単純な曲面であらわすのではなく、こめかみや口唇左右の凹部からの盛り上がりによって造形されている。

また稜線の立った鼻筋と小鼻の表現は深大寺釈迦如来像など白鳳期の特徴がみられるが、興福寺仏頭と同じく口唇の表現は自然で現実的な造形となっている。耳の表現も類例中興福寺仏頭に最も形状が似通っており、鎚だって明瞭な形をあらわす対耳輪や耳輪の巻き込みの形状も近似する。龍角寺出土の最も古い瓦は山田寺で製作された瓦を祖型としていると指摘されているが、本像にもそうした影響があるといえる。ただ遊離部の大半が欠損しているものの、丸みをもった耳朵は興福寺仏頭や法隆寺夢違観音像、新薬師寺香薬師像の平板な形状とは異なる進んだ造形である。

すでに指摘されているように面長でふくよかな顎に、顎の括りを表す点は奈良薬師寺金堂三尊像に共通しており（岩井 2015）、本像の顎の造形は薬師寺金堂三尊像に近いといえる。鑄造

技法をも勘案すれば興福寺仏頭以後、薬師寺金堂三尊像制作の前後に本像が位置すると考えられ、早くとも7世紀最末期から8世紀初頭に制作時期を求めるべきで天平彫刻と評しうる。ただ正面から側面への造形に自然さを欠く点もあり慎重に検討すべきである。縁起にいう和銅2年(709)龍角寺建立はそのままに信ずることはできないものの本像造像の目安として評価したい。久野健氏は早くにこの和銅2年創建を何らかの古記によったものとの想定をしている(久野1964)。久野氏の想定は本像の制作地を当地とし、中央からの作風の伝播に時間差をみている。本発表ではそうした時間差を考慮する必要はないと考えている。

出土瓦から当寺の創建時期(山路1999・2013)とは齟齬をきたすが、当初安置堂宇の検討や発掘調査や伽藍との総合的な考察を深める必要がある。

当初部分が残るのは頭部のみであるが等身像の古代金銅仏の遺例は少なく、彫像にとってもっとも重要な部位が残り、かつ優れた出来栄えの如来像として貴重である。制作場所はその技法的に奈良で行われた可能性も高いが、当地に安置すべく制作されたことは疑う余地がなく、東日本を代表する古代金銅仏といえる。

引用文献

- 岩井共二 2015 「薬師如来坐像 一軀」『開館 120 年記念特別展 白鳳—花ひらく仏教美術—』奈良国立博物館
- 岩佐光晴 2014 「薬師如来像一軀」『東国の仏像三 生身と靈驗—宗教的意味を踏まえた仏像の基礎的調査研究—』東北大学東洋・日本美術史研究室
- 上田三平 1942 『下総国龍角寺の新研究』龍角寺本坊
- 香取秀真 1935 「龍角寺の薬師銅像」『美術研究』37
- 関野 貞 1932 「龍角寺銅造薬師如来像及古瓦片」『歴史教育』714
- 田中喜作 1938 「龍角寺縁起解題・龍角寺縁起(公刊)」『美術研究』81
- 久野 健 1964 「関東古代彫刻史論」『関東彫刻の研究』学生社
- 松山鉄夫 1981 「龍角寺銅造薬師如来像について」『佛

教藝術』135

丸尾彰三郎 1932 「龍角寺薬師如来像」『宝雲』3

山路直充 1999 「東日本の飛鳥・白鳳時代の瓦について—下総龍角寺と尾張元興寺—」『飛鳥・白鳳の瓦と土器—年代論—』古代土器研究会

山路直充 2013 「龍角寺創建の年代」『古墳から寺院へ—関東の7世紀を考える—』六一書房

肥田 路美

早稲田大学文学学術院

2015年の龍角寺の発掘で、埴仏が一点出土した(図1)(城倉ほか2017)。蓮華座を踏む立像の脚部片だが、底面と両側面が平滑であり、像の右側に天衣が垂下する図様が確認できる点から、独尊の菩薩立像埴仏とわかる。この龍角寺出土埴仏の図様・技法・製作年代・用途について考察し、その位置づけを試みる。

埴仏とは、凹形の范で粘土を型取りして成形した半肉彫りの仏像をいう。古代インド以来各地で製作され、既存の埴仏をもとにした「踏返し」も行われた。范と粘土があれば特別な技術も要らず、簡便に同形の仏像を複製することができ、図像の改変も容易である点が、埴仏の特徴である。新しい仏像の様式や図像を摂取習得し、地方へ拡散するに当たって、埴仏は格好の媒体だった。

用途は、念持仏・護符・参拝の記念品・寺院への奉獻など信者たちの信仰活動のほか、仏塔や厨子の壁面に貼り並べて荘厳したり、仏塔内に法頌舍利として籠めることもあった。仏像を多数作って功德を積むことを目的に、日課として製作した場合もあったようだ(肥田2011)。

日本では白鳳～8世紀前半頃が埴仏の盛期



○ 早稲田大学

図1 龍角寺出土の埴仏

だったとみられ、畿内を中心に全国約150カ所(森本2013)で出土しているが、関東・東北ではごく限られる。また、約360点以上出土した奈良県山田寺では、図像や状態の特徴から壁面荘厳に使用したと推測できる一方、龍角寺をはじめ大多数の遺跡では一個体しか見つかっておらず、明らかに用途が異なる(清水1995)。

龍角寺出土埴仏は、残高5cm、幅7.5cm、最大厚2cm。菩薩像は裙を正面で打合せて短めに着け、衣端を細かく波打たせる。蓮肉の縁の雄蕊を僅かな段差で表すなど、図様は精細である。当時は像の周囲と裏面に白土による下地が施されていたとみられ、像と蓮華座には金箔を貼っていた点を確認された。尊像を引き立てる手法や、一点のみの出土である点から、厨子などに奉安して礼拝像としたものと考えられる。



図2 結城廃寺出土の観音菩薩立像埴仏

(龍角寺出土埴仏断片：右下と図像が一致)